



ギャンブル等依存症の症状や改善法について意見を交わしたシンポジウム＝甲府・山日YBS本社

「ギャンブル等依存症の理解を深めるためのシンポジウム」

回復支援、正しい知識必要

誰もが陥る可能性がある依存症は、家族を巻き込み、日常生活に支障が生じる病気です。「ギャンブル等依存症の理解を深めるためのシンポジウム」(同実行委主催)が先月、一般社団法人パチンコ・パチスロ社会

貢献機構、県遊技業協同組合助成事業として、甲府・山日YBS本社で開催されました。講演やディスカッションを通じ、依存症の当事者や家族の回復支援と、正しい知識を広める必要性について意見を交わしました。

- パネリスト**
- 志田 博和氏 県立精神保健福祉センター所長
 - 池田 文隆氏 一般社団法人グレイス・ロード 甲斐サポートセンター長
 - 望月 裕氏 全国ギャンブル依存症家族の会山梨世話人
 - 稲永 澄子氏 カウンセリングオフィス・ハートフル所長、臨床心理士、公認心理師
- 司会**
- 保坂 真吾氏 山梨日日新聞社論説委員



池田 文隆氏



望月 裕氏

シンポジウムの模様はYouTubeで公開しています。



(敬称略)

保坂真吾 経験をお聞かせください。

池田文隆 大学時代から始めたパチスロや競馬などのギャンブルにのめり込み、借金を重ね、仕事も家庭も失いました。2015年、両親の勧めで山梨にあるギャンブル専門の回復施設「グレイス・ロード」に入所。現在はスタッフとして自分の回復を継続しながら、仲間への回復支援に携わっています。

望月裕 家族がギャンブル依存症になり、グレイス・ロード入寮を機に、家族の会となりました。依存症の家族は「ギャンブルをとめた病」になり、当

事者はさらにギャンブルに依存します。会では家族の「とめた病」からの回復を目指します。家族の回復が、当事者回復の鍵となります。

稲永澄子 心理士として、依存症に対し、グループセラピーによる回復支援をしてきました。回復を促す、本人の立場から問題を眺めて、解決策へと至れるような助言を心掛けてきました。

保坂 誰にでも起こり得る病気です。後から気付く場合が多いようです。周囲はどう対処すべきですか。

池田 依存症とは「とめた病」であり、自分とは違うと否認していました。否認が解けたのは、グレイス・ロードで同じ経験を仲間と話してからです。当事者が望んで依存をやめる行動を起こさな限り、周囲がコントロールすることは難しいと思います。

望月 依存症は「否認の

問題も過小評価し、現実を認めません。指摘すると、逆ギレもします。「今日はここまで」というコントロールができず、ギャンブルであれば額が増えるなど進行性があります。その結果、家族や周囲が巻き込まれ、心身、金銭共に疲弊していきます。

誰もが陥る可能性

依存症に陥りやすい人の多くは、もともと対人コミュニケーション能力に問題があります。その人たちにとって依存対象は、歩く

病気で、当事者が認識して助けを求めてくるのは最後の段階。まずは家族が依存症を理解して、治療への道筋をつけることが大事です。多くの場合、借金がなくなるまで解決すると勘違いし、回復へのアプローチは遅

連携し最善策考える 志田氏

当事者を受け入れて 池田氏

「とめた病」改善を 望月氏

専門家介し変化促す 稲永氏

保坂 依存症改善の「山梨モデル」をつくるという仮定で、提言をお願いします。

池田 社会が依存症を正しく理解するために重要なのは、当事者を受け入れることです。グレイス・ロードの入所者は地域の行事に参加し、顔が見える関係です。地元商工会による再就職の支援も始まりました。こうした回復支援が効果を出し、「山梨モデル」として全国の注目を集めています。しかしまだ十分で、予防教育から社会復帰まで、切れ目のない支援

体制の構築が必要だと感じます。

志田 県精神保健福祉センターは、当事者と家族を支援する県立の相談機関です。自助グループにつながるだけでなく、ギャンブルの借金問題など、複雑な課題を解決する多職種と連携しています。グレイス・ロードと役割分担しながら、当事者に最適な方法を考えたいと思います。

稲永 依存症の人は認知のゆがみがあり、孤独感や心の傷を抱え、ハイテンションまたはうつ状態にあります。治療では感情的な癒やし、自律神経系の安定を重視して、ギャンブルを必要としない状態へと行動変容を促します。回復を信じていくことが何より大切です。

望月 家族は周囲に知られたくないという状況の中、県精神保健福祉センターが中心となって当事者を問題解決に導いてくれると、家族は自分たちの回復に目を向けられます。家族の問題は家族会に任せると、当事者を含めた全体的な回復が進むと考えています。

保坂 依存症はまず知る必要があります。依存症への理解を広げ、社会全体の問題として対処する必要があると感じました。

パネルディスカッション

「依存症(ギャンブル、ネットゲームほか)を考える」 ～みんなで作る山梨モデル～

基調講演

「ギャンブル等依存症について」

県立精神保健福祉センター所長 **志田 博和氏**

「依存症」と診断する基準の一つは、身体への悪影響の有無です。アルコールや薬物の過剰摂取、過食、拒食が進み、健康状態が悪くなっている場合は依存症が疑われます。もう一つは、ゲームやギャンブルといった依存対象にのめり込み、勉強や仕事など、社会的に望まれる行動が取れない状態にあることです。

しかし本人は「たまたま一回だけ」と依存状態を受け入れず否認します。借金や家庭崩壊、暴力など

に必要なのは、逃げないように再び快楽を求めてギャンブルがエスカレートしてしまっています。依存症は脳が変化した起る病気であり、意志が弱いからではなく、誰でも陥る可能性があるのです。

家族の支えが大切

依存症への危険要素は「今、ここで簡単にできること」です。近年はスマホを介してギャンブルやゲームなどを24時間継続でき、依存対象がアンダーグラウンド化しています。若くして始めるほど、依存症になるリスクは高まります。スマホやゲーム依存の子どもの増加しており、気づいたときには重症化している可

いというデータもあります。根底には、親のスマホ依存があると考えられ、スマホを子どもに守道具として与えています。スマホやネットに依存すると認知機能が十分に育たず、他人への共感や理解といった能力も伸びません。大人がスマホを置き、子どもと向き合ってリアルを楽しむことを伝えてほしいです。

能性もあります。ギャンブル依存が疑われる人は、全国に約70万人いるといわれ、コロナ禍ではネットを介したギャンブルの広まりも指摘されています。しかし、治療を受けている人は約3千人(2016年)という現状です。

依存症は回復できる病気です。治療は本人が病気を理解することから始まり、同じ問題を抱える仲間とコミュニケーションを取るなど、対人関係能力を向上させ、やめている状態の維持を目指します。回数減らすのではなく、完全にやめることが最終目標です。家族の関わり方も重要です。借金の肩代わりではなく、相談機関や家族会などで正しい知識を得て、対処法を身に付けることが、回復への近道です。

の回復を促す、本人の立場から問題を眺めて、解決策へと至れるような助言を心掛けてきました。

保坂 誰にでも起こり得る病気です。後から気付く場合が多いようです。周囲はどう対処すべきですか。

池田 依存症とは「とめた病」であり、自分とは違うと否認していました。否認が解けたのは、グレイス・ロードで同じ経験を仲間と話してからです。当事者が望んで依存をやめる行動を起こさな限り、周囲がコントロールすることは難しいと思います。

望月 依存症は「否認の



した・ひろかず氏、東京都出身。精神科医。2007年から山梨県立北病院に勤務し、依

の問題も過小評価し、現実を認めません。指摘すると、逆ギレもします。「今日はここまで」というコントロールができず、ギャンブルであれば額が増えるなど進行性があります。その結果、家族や周囲が巻き込まれ、心身、金銭共に疲弊していきます。

に必要なのは、逃げないように再び快楽を求めてギャンブルがエスカレートしてしまっています。依存症は脳が変化した起る病気であり、意志が弱いからではなく、誰でも陥る可能性があるのです。

能性もあります。ギャンブル依存が疑われる人は、全国に約70万人いるといわれ、コロナ禍ではネットを介したギャンブルの広まりも指摘されています。しかし、治療を受けている人は約3千人(2016年)という現状です。

依存症は回復できる病気です。治療は本人が病気を理解することから始まり、同じ問題を抱える仲間とコミュニケーションを取るなど、対人関係能力を向上させ、やめている状態の維持を目指します。回数減らすのではなく、完全にやめることが最終目標です。家族の関わり方も重要です。借金の肩代わりではなく、相談機関や家族会などで正しい知識を得て、対処法を身に付けることが、回復への近道です。